

宮沢賢治詩の現代語解釈 その二

——情報系一研究者の考察——

大久保 等

要約 宮沢賢治の詩の解説や一つの詩の中の部分的解釈は、多数の研究者によって試みられている。しかし、一つの詩の全体を通した現代語解釈は今まで見つけることができなかった。筆者は、前回、「八戸学院短期大学研究紀要 第四〇巻」において、宮沢賢治の詩の代表作の一つ『序』という詩について、幾つかの解説書を参考にして、また一部に筆者による具体的な説明を付け加えて詩全体の現代語解釈を試みた。今回は、宮沢賢治の詩の中で、筆者がもう一つの代表作と考えている『春と修羅』という詩について、前回と同じく、一つの詩全体の現代語解釈を試みた。

この詩では、次のような情景をうたっている。

『仏教の求道者として、堅い信仰を抱きながら、心の中によこしまな情念が蔓延って、信仰に対して真っ直ぐな気持ちで向かうことのできない自分に怒りを覚え、四月の明るい景色の中を、苦渋しながら歩き回る自分がいて、賢治は、自分自身をひとりの修羅と捉えている。そういう苦悩のために、目の前に広がる、まだ浅い春の景色は、涙に揺れる。

雲の群れが交錯し、雲と雲のはざ間に見える照り輝く天に清らかな風が行き交い、そういう景色の中に、糸杉の林が一列に並んでいる。

太陽が半透明な雲に隠れて、修羅の気持ちが強くなった賢治の感情は、樹林の精神と交わり、天上を見上げれば、魯木のように延び広がる雲の群落が見える。それに重なって、糸杉の枝が悲しそうに茂っている。すべてが二重に見える景色の中で、修羅の心は現実の感覚を失った。

その時、草地の間を過ぎてやってきた農夫が賢治を見る。実在を離れて、精神的な存在にもなり切れないでいる自分を見付ける。

仏教でいう「真の言葉」は、賢治自身にも、この地上にも実現されていないことを改めて思い知らさ

れて、涙が溢れてぼろぼろと地面に落ちる。

「私のこの体よ、空に向かって微塵に砕け散ってしまえ」

いちようの木ノ梢で稲光が光って、糸杉の林はいよいよ暗く影を落とし、辺り一面、にわか雨がばらばらと降り出した。」

筆者は、宮沢賢治が、仏教の求道者としての生き方を探して苦しみもがいている描写と、まだ浅い春の、明るい日中の景色の描写との対比や、修羅としての賢治の感情が糸杉の林の精神と交わり現実の感覚を失っている描写と、嵐がくる前の流れる雲や稲光が発光する描写との対比は、他に類を見ない、臨場感ある優れた映像効果を生み出していると考ええる。

一 はじめに

宮沢賢治の詩は、地質学、鉱物学、植物学、天文学、気象学などの自然科学用語の他に、仏教用語（梵語）、外国語（エスペラント語風の用語など）が多用されており、一般に難解であると云われる。その為、宮沢賢治の童話作品は広く愛読されているにも関わらず、詩作品に関しては、宮沢賢治研究者などごく少数の人を除いて、「雨ニモマケズ、風ニモマケズ」など、限られた幾つかの詩以外には興味を持たれていないのではないかと考える。

このような状況において、宮沢賢治の詩を一般の人にも分かるように現代語解釈することは、意義のある事だと考え、前回、「八戸学院短期大学研究紀要 第四〇巻」において、宮沢賢治の詩の代表作の一つ『序』という詩について、幾つかの解説書

を参考にして、また一部に、筆者による具体的な説明を付け加えて詩全体の現代語解釈を試みた。

今回、宮沢賢治の詩の中で、筆者がもう一つの代表作と考えている『春と修羅』という詩についても、幾つかの解説書を参考にし、また一部に筆者による具体的な説明を付け加えて詩全体の現代語解釈を試みた。『春と修羅』という詩の題名は、詩集の書名にも使っており、宮沢賢治自身においても、代表作の一つと考えていただろうと考える。

宮沢賢治の詩の解説や一つの詩の中の部分的解釈は、多数の専門家によって試みられてきた。しかし、専門的になり過ぎて分かり難いと常々感じていた。また、一つの詩の全体を通じた現代語解釈は今まで見つけることができなかった。それが、宮沢賢治の詩について、一つの詩の全体を通じた現代語解釈を行ってみようと思ったきっかけである。

筆者の現代語解釈について、他の研究者が異なる解釈を提示されることは、大変望ましいことである。そのことよって、宮沢賢治詩の正しい解釈が広く一般に普及していくことを望んでいる。

二 詩「春と修羅」の現代語解釈

宮沢賢治は、『心象スケッチ』と呼ぶ自身の詩集『春と修羅』第一集に、詩集の書名にも使った『春と修羅』という詩を書いている。この『春と修羅』について、現代語解釈を試みたい。まず、詩の全文を掲載する。

(一) 「春と修羅」の全文

春と修羅

(mental sketch modified)

心象のはいろいろはがねから
あけびのつるはくもにからまり
のばらのやぶや腐植の湿地
いちめんのいちめんの詠曲模様
(正午の管楽よりもしげく
琥珀こはくのかけらがそそぐとき)
いかりのながさまた青さ

宮沢賢治詩の現代語解釈 その二(大久保)

四月の気層のひかりの底を
唾つばきし はぎしりゆきさする
おれはひとりの修羅なのだ
(風景はなみだにゆすれ)

砕ける雲の眼路めぢをかぎり
れいろうの天の海には

聖玻璃せいはりの風が行き交ひ

Zypressen 春のいちれつ

くろぐろと光素こうそを吸へば

その暗い脚並あしなみからは

天山てんしやんの雪の稜りやうさへひかるのに

(かげろふの波と白い偏光)

まことのことばはうしなはれ

雲はちぎれてそらをとぶ

ああかがやきの四月の底を

はぎしり燃えてゆきさする

おれはひとりの修羅なのだ

(玉髓ぎよくすいの雲がながれて

どこで啼くその春の鳥)

日輪青くかげろへば

修羅は樹林に交響し

陥おちりくらむ天の椀わんから

雲の魯木ろぼくの群落が延び

その枝はかなしくしげり

すべて二重の風景を

喪神の森の梢から

ひらめいてとびたつからず

(気層いよいよすみわたり

ひのきもしんと天に立つころ)

草地の金色をすぎてくるもの

ことなくひとのかたちのもの

けらをまとひおれを見るその農夫

ほんたうにおれが見えるのか

まばゆい気圏の海のそこに

(かなしみは青々ふかく)

Zypressen しづかにゆすれ

鳥はまた青ぞらを截る

(まことのごとははここになく

修羅のなみだはつちにふる)

あたらしくそらに息つけば

ほの白く肺はちぢまり

(このからだそらのみちにちらばれ)

いてふのこずゑまたひかり

Zypressen いよいよ黒く

雲の火ばなは降りそそぐ

(一九三二、四、八)

(二) 難解用語の意味解説

以下の用語説明は、新村出編「広辞苑」第二版 岩波書店昭和四十四年五月十六日発行を中心に、(ア)新潮文庫「現代詩の鑑賞 下巻」伊藤信吉著 新潮社 昭和四十三年五月三十日改版発行の四十六頁にある「語注」、(イ)NHKブックス「宮沢賢治の見た心象」田園の風と光の中から「板谷栄城著 日本放送出版協会 平成二年四月一日発行、(ウ)新書館ハンドブック・シリーズ「宮沢賢治ハンドブック」天沢退二郎編 一九九六年六月二十五日初版発行、を主な参考に行っている。

① mental sketch modified: 修飾された心象スケッチ。心の風景をスケッチしたが、心の風景を正確に伝えるのは難しいので、近似的な修飾表現に置き換えたという意味のようだ。

② 修羅: 阿修羅の略。古代インドの神の一族で、後に神々の敵と見なされる。仏教では仏法の守護神だが、バラモン教では悪神とされる。仏教で、六道(地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上)の一つで、人は、怒り、侮り、愚かの業により、修羅に落ちるとされる。絶えず闘争を好む。

③ 詠曲: 自分の意思を曲げて、人に媚(へつち)うこと。

④ れいろ(玲瓏): 美しく照り輝くさま。

⑤ 玻璃: 天然のガラス状の物質。

⑥ Zypressen: (独語) 糸杉。西洋檜。

⑦ 光素: エーテルは、十九世紀までの物理学で、空間に充滿していると考えられていた物質である。光は波の性質を持って

いるので、光が伝播する為には何かの媒質が必要であり、その媒質として考えられた。しかし、アインシュタインが特殊相対性理論で光の伝播には媒質を必要としないとしてエーテルの存在が否定された。

⑧天山^{てんしん}…中国の西域にある天山山脈のこと。天山山脈は岩手県とほぼ同緯度であり、また賢治は仏教伝来のルートである西域に懂れていたようだ。

⑨まことのことば…仏教でいう「真実の言葉」、「仏さまのお言葉」の意味。

⑩玉髓^{ぎよくすい}…石英の結晶が集まった鉱物。半透明や不透明でろうのような光沢がある。白、紅、緑色などあるが、ここでは白色。

⑪魯木^{ろぼく}…古生代石炭期に繁茂した巨大なシダ植物。とくさ類に属する。

⑫喪神^{そうじん}…喪心。放心。正気を失うこと。

⑬けら…箕^み。北東北、南部地方の方言。

(三) 段落ごとの現代語解釈

以下、段落ごとに分けて現代語解釈を試みる。この段落分けは、詩の本文中の途中に出現する、それまで叙述していた内容と異なる、括弧で括られた情景描写をカギにして、筆者自身で仮りの段落分けを行ったものである。

また、(一)の詩の全文をみても分かるように、詩の各行の始まりが波を打つように字下げされている。これは、何人かの研究者が指摘しているように、詩の情景が展開されていく中で、

修羅の気持ちに心を覆われた、賢治の感情の起伏を表現しているのではないかと考えている。しかし、以下に行った詩本文の現代語解釈の中で、修羅としての感情の起伏を十分に説明できたとは思えない。何故なら、通常、感情の高ぶった箇所と波の高まりを一致させるだろうと考えるのだが、詩本文では必ずしもそうなっていないからである。但し、賢治の心が、それまでの冷静な人間的な視点から、修羅の感情に心を覆われ、その修羅の感情に心が覆われている間の描写を波打った文章で表現したというのは、確かだろうと考える。

まず、詩を現代語解釈する前の前提として、宮沢賢治が、この時期、日々、仏教の求道者としての生き方を探し求めていたという背景がある。

その上で、宮沢賢治は、この日、正午前の時間帯に、東北地方の遅い春、多数の種類の花々が一齐に咲き出して世界を明るくする、そうなる前の、野山の雪が融けて、木々の枝が芽吹き始める頃の、そういう景色の中で、丘の上を散策している。

心象のはいろいろはがねから

あけびのつるはくもにからまり

のばらのやぶや腐植の湿地

いちめんのいちめんの詔曲^{みことく}模様

(正午の管樂よりもしげく

琥珀^{こはく}のかげらがそそぐとき)

いかりのながさまた青さ

四月の気層のひかりの底を
唾し はぎしりゆききする

おれはひとりの修羅なのだ

(風景はなみだにゆすれ)

仏教の求道者として、心の中に鋼鉄のような堅い信仰を抱いていながら、その心の中では、よこしまな情念があけびのつるのように延び広がって、心の中で、濁りが無いはずの空の雲にまで絡まり、あつちにもこつちにも野ばらの藪や腐植した湿地が見付けられる。私の心の中には、そういう詔いおもねる気持ちがあびこっている。

(街のあちこちから正午を知らせる鐘が鳴り出したが、それよりも激しく、昼十二時の光線が琥珀のかけらのようにそそいでいる)

そういう、信仰に対して真つ直ぐな気持ちで向かうことのできない自分自身に怒りを覚え、四月の明るい光りの底を、唾し歯ぎしり行き来している。私は、そういう仏教の悟りの気持ちに届かない、ひとりの修羅である。

(そういう苦悩のために、今、目の前に広がる、まだ浅い春の景色は、涙に揺れている)

砕ける雲の眼路をかぎり

れいろうの天の海には

聖玻璃の風が行き交ひ

Zypressen 春のいちれつ

くろぐると光素を吸へば

その暗い脚並からは

天山の雪の稜さへひかるのに

(かげろふの波と白い偏光)

まことのことばはうしなはれ

雲はちぎれてそらをとぶ

ああかがやきの四月の底を

はぎしり燃えてゆききする

おれはひとりの修羅なのだ

幾つかの雲の群れが交錯し、砕け、その雲と雲の交錯が途切れたはざ間の高い空には、麗しく照り輝く天が広がり、けがれない、清らかなガラスのような風が行き交い、糸杉の林はその景色の中に一列に並んでいる。

糸杉の林の陰まで来て、ひんやりした大気を吸って、よく見れば、その一列に並ぶ糸杉の林間を通して、その向こうに、天山山脈のような奥羽山脈のまだ解けやらない雪の稜線が光って見える。それは、かげろふの波のようにも見え、白く偏光しているようにも見える。

今、私が生きているこの世界では、既に、仏教でいう「真の言葉」は失われてしまい、それを象徴するかのようには、空を歩き交う雲は、四方に千切れて飛んで行く。

「ああ、輝いている四月の景色の底を、求道者としての悟りを見つけれないまま、求道の心を燃やしながらも、唾し、歯ぎしりし、じれったく行き来している私は、仏教でいう悟りの

気持ちに届かない、情念や猜疑、嫉妬の心盛んで、他人に勝ちたい気持ちばかりが強い、ひとりの修羅なのだ」

(玉髓の雲がながれて)

どこで啼くその春の鳥)

日輪青くかけろへば

修羅は樹林に交響し

陥りくらむ天の椀から

雲の魯木の群落が延び

その枝はかなしくしげり

すべて二重の風景を

喪神の森の梢から

ひらめいてとびたつからす

ろう光沢のような照り輝きのある白色の雲が流れて行き、どこからか春の鳥の鳴き声が聞こえてくる。

太陽が半透明な雲に蒼く隠れて、私は糸杉の林の中を歩いている。修羅の気持ちが勝った私の感情は樹林の精神と交わり響きあい、見上げれば、墜ちて行きそうな、糸杉の林のてっぺんの葉と葉のはざ間から、魯木のような雲の群落が見える。その手前には、糸杉の枝が暗く悲しそうに茂っている。修羅の感情が強い私の心の景色とまだ浅い春の景色が重なり、空を流れる魯木のような雲の群落とその手前に生い茂る糸杉の枝が重なり合い、すべてが二重に重なり合った景色の中で、私は樹林と感情を交感して現実の感覚を失ってしまった。そういうすべて二

重に見える景色の中で、糸杉の枝の梢から、稲光にひらめいてカラスが急に飛び立った。

(気層いよいよすみわたり)

ひのきもしんと天に立つころ)

草地の金色をすぎてくるもの

ことなくひとのかたちのもの

けらをまとひおれを見るその農夫

ほんたうにおれが見えるのか

まばゆい気圏の海のそこに

(かなしみは青々ふかく)

Zypressen しづかにゆすれ

鳥はまた青ぞらを截る

(まことことはここになく)

修羅のなみだはつちにふる)

嵐がくる前兆かとも思われる静けさの中で、気層がいよいよ澄み渡り、糸杉もしんとして天に立っている。

その時、春浅い枯れた草地の金色の間を過ぎて来るものがある。まぎれもなく、人のかたちをしている。

裏をまもって、やってきたその農夫は私を見る。修羅の私は、既に樹林と交感し、実在を離れて精神的な存在になっているはずなのに、「ほんとうに私が見えるというのか? ああ、まばゆい気圏の海の底で、実在を離れた精神的な存在にもなり切れないでいる私がいる」

その悲しみは青々として深く、糸杉の枝は静かに揺すれ、鳥がまた青空を裁^きって飛んでいく。

仏教でいう「真^{まこと}の言葉」は、私にも、この地上にも実現されていないことを改めて思い知らされて、修羅として生きている私は、ぼろぼろと涙が溢れて地面に落ちる。

あたらしくそらに息つけば

ほの白く肺はちぢまり

(このからだぞらのみちにちらばれ)

いてふのこずえまたひかり

Zypressen いよいよ黒く

雲の火ばなは降りそそぐ

(一九二二、四、八)

気を取り直して、新しく空に向かって息つけば、ほの白く肺は縮まる。

「私のこの体よ、空に向かって微塵に砕け散ってしまえ」

いちようの木の梢が稲光でまた光って、糸杉の林はいよいよ暗く影を落とし、雲の火花であるにわか雨が、辺り一面ばらばらと降り出した。

三 用語や文節の詳細解説

前節で述べた現代語解釈において、解釈が難しかった用語や文節の詳細解説を試みる。前節の現代語解釈においては、多分に疑問が残りながら、結果として前節のような一つの解釈を行ったものである。以下の解説は、他の宮沢賢治研究者の解説や解釈を参考にしているが、筆者なりの理解も含めている。

(ア) mental sketch modified

この言葉は、前節の「(二) 難解用語の意味解説」でも述べた通り、「修飾された心象スケッチ。心の風景をスケッチしたが、心の風景を正確に伝えるのは難しいので、近似的な修飾表現に置き換えた」という意味のようだ。

要するに、私たちは通常「言葉」を使って、他の人とコミュニケーションを取っている訳だが、例えば、筆者自身が確か十九歳の時に、旅の途中、東海道新幹線で東京から京都に向かった際に、車中から初めて富士山を見た時の感動、車窓の景色に大きく姿を現した、その圧倒的な感動を、地元の八戸に帰って、周辺には富士山のような成層火山の雄大な景色が見えたらない、そういう景色の中で日常生活をしている家族に話しても、正しく伝える事はできなかった。それと同じように、宮沢賢治の考えている事、感じている事を、その通りの感じ方で他の人に正しく伝える事はできないので、他の人にも分かるような近似的な修飾表現を用いると云っている。

(イ) Zypressen 春のいぢれ

糸杉は、ヨーロッパで昔から街道の両側に街路樹として植えられたという。そうすると、ここでも街路樹として、道路の両側に植えられている景色を「いちれつ」と呼んだのかもしれない。しかし、筆者は整然と植林された糸杉の林と解釈した。それは、後段で「修羅は樹林に交響し」や「喪神の森の梢から」など、街路樹の描写としては似つかわしくない表現が出てくるからである。ところで、糸杉の木はけやきの木と比べて、葉の茂り方が波打っており、筆者は安心感よりは不安感を覚える印象がある。後段で「修羅は樹林に交響し」とあるが、この葉の茂り方が修羅の感情の起伏と交わり響きあった、ということではないだろうか、と考える。

(ウ) くろぐろと光素を吸へば

「くろぐろと光素を吸へば」をどう解釈すべきか。前節の現代語解釈では「糸杉の林の陰まで来て、ひんやりした大気を吸った」とした。「エーテル」は、前節「(二) 難解用語の意味解説」で述べた通り、元もとの意味は、かつての物理学で、光が伝播する媒質と考えられていた、空間全体に充滿すると仮定された物質のことだろうが、ここでは、周囲に充滿する大気をエーテルに例えた、と解釈した。宮沢賢治は既に糸杉の林の中に踏み入れたか、その林の端に来ているので、糸杉の林の陰で大きく呼吸したから、「くろぐろとした光素」なのだろうと考える。

詩の後段には、「あたらしくそらに息つけば／ほの白く肺はちぢまり」という表現があり、「くろぐろと光素を吸へば」と

いう表現と対をなしている。この二つの表現は、詩全体として、心の中で、仏教の「悟り」への憧れと「修羅」の意識が葛藤している描写と、浅い春の日中に、眼前に展開される、急変する天気の変化を二重の景色として捉えているから、そういう意味で、くろぐろと大気を吸うことと、息ついてほの白く肺がちぢまることに、何か意味を持たせたのかもしれない。つまり、光素を「くろぐろと吸って」、心の中で修羅の意識が強まり、その修羅の感情の抑揚を、字下げの文節で波打つように表現し、農夫に見られて、はっと正気に返って、新しく息つけば、修羅の意識から離れて、その修羅の意識を客観視できる人としての肺がほの白く縮まったのである。

(エ) その暗い脚並からは／天山の雪の稜さへひかるのに

宮沢賢治はこの詩を書いた当時、稗貫郡立稗貫農学校（現在、その場所は総合花巻病院の一部になっているという）教諭であり、詩の創作の場所は、花巻市近郊の畑か丘のような場所であるはずだ。それなのに、急に「天山山脈」が登場するのは何故か。「宮沢賢治ハンドブック」天沢退二郎編（新書館、一九九六年六月二十五日初版発行）によると、賢治は、仏教伝来のルートである、中国本土の西方地域に強い関心や憧れを抱いていたらしいので、糸杉の林間から見える、奥羽山脈の峰に残る残雪の反射の連なりを、仏教伝来のルート上にある天山山脈の稜線に残る残雪の連なりに例えたのではないかと考える。

北上山地の残雪でなく奥羽山脈の残雪と解釈したのは、花巻市近郊から西に見える奥羽山脈が、中国の西域に位置する天山

山脈と位置関係が一致するからである。

(オ) まことのことばはうしなはれ

「まことのことば」は仏教でいう「真実の言葉」、「仏さまのお言葉」という意味である。不信心な檀家である筆者には、「まことのことば」がどのような言葉であるのか、正直云って分からない。たぶん、私たちが社会生活する中で、金銭的裕福や社会的名誉の追及にとらわれながら生活している中で、その言葉に接すると、はっとして人生の悟りを得る、そのような有り難い言葉なのだろうと考えている。後段に「まことのことばはここになく」とも記されており、現在私たちが生活している世界には、「まことのことば」は浸透していないことが窺える。

(カ) 雲の魯木の群落が延び／その枝はかなしくしげり

空のうえを、古生代石炭紀に繁殖した「魯木」の地下茎の茎のように沢山の雲が延び広がっていく、と解釈したい。

まず、「魯木」がどのような木であったのか、生物の歴史図鑑を見ると、春先に畑に生える「スギナ」の若草を大木にしたような想像図が載っている。しかしここでは「群落が延び」のほうに重点を置いて、今、活発に延び広がっていく雲の流れを、魯木の地下茎が延びて繁茂する様子で表現したのではないか。

次に、「その枝はかなしくしげり」の「その」は何を指すのかが不明である。前の行から続くのだとすると、魯木のように延び広がった雲が枝を伸ばしていることになる。次の行に「す

べて二重の風景を」とあるから、樹林の精神と交感している修羅としての賢治の感覚は、糸杉の林の中で、頭上の葉と葉のはざ間から見える、魯木のような雲の群落と、数メートル上に見える糸杉の枝が重なって、雲の群落から延びた枝のように見えるのかもしれない。しかし、今回の現代語解釈では、「糸杉の枝が暗く悲しそうに茂っている」とした。それは、次の行に「すべて二重の風景を」とあることから、賢治自身、それが重なり合った景色だと、ある程度は認識しているからである。但しそれは、樹林の精神と交感している修羅の精神状態からすれば、曖昧模糊な状態、判然としない区別がつかない状態なのかもしれない。

(キ) すべて二重の風景を

「すべて二重の風景を」の箇所を、どのような現代語訳にすべきかは、大変難しい。筆者は、前段まで、求道者としての生き方を探して苦悩している賢治の心の風景と、まだ浅い東北の春の景色が交互に描写されていることと、嵐の前の雲の流れと糸杉の林の景色が交互に出現することから、この二つの対比を通して「すべて二重の風景」としたのではないかと考えた。

(ク) 喪神の森の梢から／ひらめいてとびたつからす

「喪神の森の梢から」の「喪神の森の梢」が何を指すのかは、「その枝はかなしくしげり」の「その」は何を指すのかと同じように不明である。ここでも、「すべて二重の風景を」を元にして考えると、樹林の精神と交感して高揚している修羅の感情

は、現実の感覚を失って、糸杉の梢から稲光にひらめいて急に飛び立ったカラスを、二重に重なって見える幻想の景色から飛び立ったように感じられたのではあるまいか。

(ケ) 草地の金色きんをすぎてくるもの／ことなくひとのかたちもの／けらをまとひおれを見るその農夫

「枯れた草地の金色を通り過ぎてやってきた、人の形をしたもの」、「糞をまとってやってきたその農夫は私を見る」、というのだから、この農夫は、乱れ流れる雲の動きや稲光から、これから嵐が来ることを前もって知っていたのである。農夫とすれ違った時は、にわか雨が降り出す前である、と考える。そして農夫は、「もうすぐ嵐が来るのが分かっているのに、すれ違ったこの人は、雨具も持たずに何をしているんだろう」と訝しげに賢治を見ただろうと、推察される。

(コ) いてふのこずえまたひかり／Zypressen いよよ黒く／雲の火ばなは降りそそぐ

「雲の火ばな」は、ある雲とすれ違う雲との摩擦で発生すると考えられるから、気象学的には「雲のひばな」を「稲光いなひかり」と解釈すべきかもしれない。しかしここでは、それ以前に何回か稲光っており、「とうとうにわか雨がばらばら降り出した」と解釈したい。よってここで云う「雲のひばな」は、辺り一面、雷雲が覆って暗くなり、激しく降り出した「にわか雨」である。そうすれば、その前行の「いてふのこずえまたひかり」や「Zypressen いよよ黒く」とよく符号する。

また現在は、過去の気象データについて調べることが可能であり、宮沢賢治は、この詩を書いた頃、現在の花巻市内にあった稗貫農学校の教諭をしていたので、一九二二年四月八日の花巻地方の天気情報を調べたが、その当時（大正十一年）の花巻地方の気象データは見つけることができなかった。しかし、近くの都市の気象データ（降水量）は記録が公表されており、それによると秋田市が四月七日七・五ミリメートル、四月八日八・二ミリメートル、四月九日二・一ミリメートル、宮古市が同じく一・二ミリメートル、〇・三ミリメートル、〇・〇ミリメートルとなっている。そのため、その中間の位置にあたる花巻地方にも雨があつたのは確実だったと考える。もちろん、それが雷雨だったのかどうかは不明である。

四 全体的な要約

以下に、詩全体を通して要約を試みる。

仏教の求道者として、心の中に鋼鉄のような堅い信仰を抱きながら、心の中には、よこしまな情念が蔓延って、心の中に野ばらの藪や腐植した湿地が見付けられる。そういう、信仰に対して真っ直ぐな気持ちで向かうことのできない自分に怒りを覚える。私は、四月の明るい景色の中を、仏教という悟りの気持ちに届かない、苦渋しながら行き来している、ひとりの修羅である。

（そういう苦悩のために、今、目の前に広がる、まだ浅い春

の景色は、涙に揺れている)

雲の群れが交錯し、砕け、雲と雲のはざ間には、麗しく照り輝く天が広がり、ガラスのような風が行き交い、糸杉の林がそういう景色の中に一列に並んでいる。

ひんやりした大気を吸って、よく見れば、糸杉の林間を通して、天山山脈のような奥羽山脈の雪の稜線が光って見える。

この世界では、仏教でいう「真の言葉」が失われてしまい、それを象徴して、空を行き交う雲は、四方に千切れて飛んでいく。

「輝いている四月の景色の底を、求道者としての悟りを見つけれないまま、じれったく行き来している、私はひとりの修羅なのだ」

照り輝きのある白色の雲が流れて行き、どこからか春の鳥の鳴き声が聞こえる。

太陽が半透明な雲に隠れて、糸杉の林の中を歩いていけば、修羅の気持ちが強くなった私の感情は樹林の精神とひびき合い、天上を見上げれば、糸杉の葉と葉の間から、魯木のような雲の群落が見える。その手前には、糸杉の枝が悲しそうに茂っている。修羅としての心の苦渋とまだ浅い春の景色が重なり、空を流れる雲の群落と生い茂る糸杉の枝が重なって、すべてが二重になった景色の中で、修羅の私は現実の感覚を失った。そういうすべて二重に見える景色の中で、糸杉の梢から、稲光にひらめいてカラスが急に飛び立った。

嵐がくる前の静けさの中で、気層が澄み渡り、糸杉もしんとして天に立っている。

その時、草地の間を過ぎて来るものがある。やってきたその農夫は私を見る。

私は既に樹林と交感し、実在を離れて精神的な存在になっているはずなのに、実際は精神的な存在になり切れないでいる自分を見付ける。

「ほんとうに私が見えるというのか？ ああ、まばゆい気圏の海の底で、実在を離れた精神的な存在にもなり切れないでいる私がいる」

その悲しみは青々として深く、糸杉の枝は静かに揺すれ、鳥がまた青空を截って飛んでいく。

仏教でいう「真の言葉」は、私にも、この地上にも実現されていないことを改めて思い知らされて、私は、ぼろぼろと涙が溢れて地面に落ちる。

気を取り直して、新しく息つけば、ほの白く肺は縮まる。

「私のこの体よ、空に向かって微塵に砕け散ってしまえ」

いちようの木梢で稲光がまた光って、糸杉の林はいよいよ暗く影を落とし、辺り一面、にわか雨がばらばらと降り出した。

五 終わりに

前回、「八戸学院短期大学研究紀要 第四〇巻」において、宮沢賢治の詩の代表作の一つ『序』という詩について、一つの詩全体を通じた現代語解釈を試みた。今回は、筆者が、賢治の

詩の中で、もう一つの代表作と考えている『春と修羅』という詩について、同じく一つの詩全体の現代語解釈を試みた。

筆者は、宮沢賢治が、仏教の求道者としての生き方を探して、苦しみもがいている描写と、まだ浅い春の、明るい日中の景色の描写との対比や、修羅としての賢治の感情が糸杉の林の精神と交わり現実の感覚を失っている描写と、嵐がくる前の流れる雲や稲光が発光する描写との対比は、他に類を見ない、臨場感のある優れた映像効果を生み出していると考ええる。

こういう現代語訳で、ほんとうに宮沢賢治が表現したかった心象の描写になっているのかどうかについて、今後とも他の研究者の方々の研究成果を参考にしながら考えていきたい。

参考文献

- (ア) 新村出編『広辞苑 第二版』岩波書店 一九六九年
- (イ) 伊藤信吉著『現代詩の鑑賞 下巻』新潮文庫 草二〇四B、一九六八年改版
- (ウ) 草野心平編『宮沢賢治詩集』新潮文庫 青三〇、一九六九年
- (エ) 板谷栄城『宮沢賢治の見た心象〜田園の風と光の中から』NHKブックス五九一、一九九〇年
- (オ) 原子朗、他監修『宮沢賢治の世界』展 図録、朝日新聞社、一九九五年
- (カ) 天沢退二郎編『宮沢賢治ハンドブック』新書館、

一九九六年

(キ) 斉藤文一『宮沢賢治の世界 銀河系を意識して』国文社、二〇〇三年